

核兵器問題を考える～長崎への修学旅行を通して～

長野工業高等学校 柳澤 秀樹

1. はじめに

本校は、1学年7科7クラス（機械科・電気科・情報技術科・工業化学科・土木科・建築科・環境システム科）を擁する工業高校である。今年度、私は2年建築科の担任となったので、昨年に引き続きHR活動の中で新聞を利用することとした。新聞の設置場所の制約と教科（国語科）の授業進度の制約との中で、担任クラスのみを対象とせざるを得なかったためでもある。

2. 実践の概要

対象生徒 2学年（1クラス）…建築科2年生 男子37名・女子3名
（実践者が担任しているクラス）

科目 HR活動

講読期間 10・11・12月

購読紙 信濃毎日新聞（朝夕刊）・朝日・読売・毎日・産経・中日・日本経済・長野日報

設置場所 建築科2年HR…教室内の一角にカラーボックスを用意し、ボックス内には前日までの新聞を1週間分を目安として入れておいた。ボックスの横に当日の新聞を始業前に設置した。置くのは基本的に担任であった。
本校では昼休み後にSHRが設定されているため、毎朝始業前に連絡事項などをHRに掲示連絡に行く時に行った。
昨年同様の場所であり、生徒達は思い思いに新聞を読む習慣が身につけている者が昨年より増えた。

NIEの実践校として2年目を迎え、担任するクラスが2年生となった。そこで高校生活の中でも大きな行事である修学旅行の事前・事後の学習と絡めて新聞を利用できないかと考えた。

修学旅行の目的地は、「長崎・福岡・大阪・神戸」であった。学習の柱として、原爆資料館を中心とする長崎での「平和学習」と、神戸の人と未来・防災センターでの「防災震災学習」とにした。後者は建築科であるので、長崎、神戸の異国情緒あふれる建物やヤフードーム見学と併せて、建造物の倒壊の様子や被災者の体験から心に染みる学習ができたと思う。

新聞の活用は、長崎での「平和学習」から「核兵器問題を考えよう」と取り組むことにした。10月19日から3泊4日の日程の修学旅行であったが、直前の10月9日に北朝鮮が核実験を行った時期でもあり、語弊があるかもしれないが“タイムリー”な企画ともなった。

3. 実践の内容

(1) 事前学習

世界史の授業の中で「戦争と平和」をテーマに、太平洋戦争について教科書の内容の他にビデオを見たり、資料を読んで考えたりしていただいた。HRとしては思いの外、満足な時間が取れなかったので、HRで7月29日から長崎で行われた「国際平和シンポジウム『核なき明日へ 61年目のナガサキから』」の新聞記事（8/3朝日新聞）を紹介したり、8月9日に行われた原爆犠牲者慰霊平和祈念式典における伊藤一長・長崎市長の「長崎平和宣言」（8/10朝日新聞）を読み合わせたぐらいしかできなかった。私は生徒に「平和宣言の『科学者は、自分の国のためだけではなく、人類全体の運命と自らの責任を自覚して、核兵器の開発を拒むべきです。』の箇所は、工業高校で学ぶ君達にも向け

られたメッセージとして考えて欲しい。」と話した。

(2) 修学旅行中

初日に長崎空港から長崎平和公園に訪れ、続いて原爆資料館にて見学をした。広島原爆資料館ほどの規模ではないが、約1時間ほどの見学時間中、生徒達は被爆のむごさを物語る展示物・写真、そして手記などを食い入るように見ていた。中学時代に広島を訪れた経験のある者は、その時の記憶と重ね、平和の尊さを改めて感じていた。

(3) 事後学習

修学旅行から戻りLHRを使い、「修学旅行記」を書かせることとした。放っておくと、小学生の絵日記のような作文になってしまうので、「思い出に残った場所・出来事1～2つに焦点を絞って書こう」と話した。初めて乗った飛行機や門司から大阪南港までの夜行フェリーでの興奮、建築科らしく長崎や神戸の異国情緒あふれる建物やヤフードーム等近未来の建物に心惹かれたこと、そして旅行後半の大阪、神戸での自由散策のこと等、さまざまな紀行文が書かれる中で、やはり原爆資料館や人と未来・防災センターで見聞きしたことが強く印象に残ったという者が多かった。

--- 【生徒の修学旅行記から抜粋】 -----

・平和公園には、日本の観光客よりも外国の方が多く見られた。自分達のやってしまったことをただ見に来ただけか、それともこのようなことが二度と起こらないように願ってくれたのかと思ってしまった。

そして、原爆資料館に着き、見学を始めた。一番気になったことは原子爆弾の大きさだった自分の何倍にもなるような大きさに唖然とした。こんなにも大きな爆弾が空から落ちてきて爆発したらやっぱり助かるはずがないと思った。子供は黒こげになり、ビンは一瞬にして溶け、爆風によりガラスは飛び散り人に刺さっていた。たった一つの爆弾が人の命をこんなにも簡単に奪ってしまっているのかと実感された。人が作ったものが人や建物、そこにあった全てのモノがなくなってしまう。そこまでして得たかったものは人の命よりも大切なものなのかと改めて思った。

・特に印象に残ったのは、九州では長崎原爆資料館でした。長崎は広島に次ぎ、世界で二番目に原爆を落とされた都市です。資料館内には、原爆のせいで一瞬にして焼け焦げてしまった服や原爆のために骨だけになってしまった人の写真などがありました。自分からしてみれば、原爆は体験したこともなく今まで無縁の話だと思っていたけれど、これらを見て、その当時の人の気持ちを考えると原爆はもう二度と使ってはいけません。どれだけ平和が大切かがわかりました。

・特に印象に残った場所は、長崎平和公園、原爆資料館である。ここでは原爆の恐ろしさや威力が今まで以上に知ることができた。平和公園では、原爆の恐ろしさや悲しさを忘れないように多くの像があった。中でも平和 祈念像はひととき大きく、たくさんの思いが詰まっているものだった。原爆資料館では実際の大きさや威力、被害がわかった。被爆した人の写真や残った骨など、どれも生々しく残酷なものだった。

・楽しいことも沢山あったわけですが、原爆資料館や防災センター等、過去の大きな爪跡を生々しく感じると同時に、これからの知識となり、建築関係にも活かしていけるようにしたいと強く思いました。

・原爆資料館や人と未来防災センターでそれぞれの怖さを知り、自分が今どれだけ幸せな人生を送れているか、ひと一人の命がどれだけ大切かなど、修学旅行を通して何か学べることでよかったと思う。

続いて、12月8日に「核兵器問題を考える～長崎への修学旅行を通して～」という授業を行った。公開授業としてNIE事務局長の横内様、NIEアドバイザーの鯛中様にお越しいただき、その様子は信濃毎日新聞でも記事にいただいた。

次のようなレジュメに沿って授業を展開した。

NIE授業「核兵器問題を考える～長崎への修学旅行を通して～」

建築科2年〔 〕番 氏名〔 〕

1. 初めに

- ・今日12月8日はどんな日か？ 1940年12月8日 太平洋戦争開戦
- ・日本は唯一の被爆国 1945年 8月6日 広島に原爆投下 推定14万人死亡
1945年 8月9日 長崎に原爆投下 推定 7万4千人死亡
- ・現在の日本は…

【日本国憲法第9条】

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

- 2 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

【日本国憲法第21条】

- 1 集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。
- 2 検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

【非核三原則】

「核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず」という、日本国の国是とされている原則である。

2. 長崎への修学旅行～平和祈念公園・原爆資料館を見学して～（君達の「修学旅行記」から）

- ・【資料1】学級通信「闘魂No.28」－長崎平和宣言（8/10朝日新聞より）
- ・【資料2】君達の「修学旅行記」の抜粋から

3. 北朝鮮が核実験を行う－2006年10月9日

- ・【資料3】「北朝鮮が核実験」（10/10信濃毎日新聞より）－学級通信「闘魂No.34」でも引用。
- ・【資料4】「放棄させる努力を今から」（10/11信濃毎日新聞・社説より）
「身勝手許す時期過ぎた」（10/11産経新聞・主張より）
- ・【資料5】「北朝鮮核実験と核拡散の危機」（11/15中日新聞サンデー版より）

4. 私たちはどのように核問題を考えていけばよいか？

- ・【資料6】「核実験『脅威』92%」（10/11信濃毎日新聞より）
- ・【資料7】国際平和シンポジウム「核なき明日へ 61年目のナガサキから」（8/3朝日新聞より）
- ・【資料8】「核保有議論を」（10/16中日新聞より）

中川昭一自民党政調会長の核武装論を肯定する発言

5. さて、世界で2番目かつ最後の原爆被災地・長崎を訪れた君達は、これらの状況をどのように考えるか？

「1. 初めに」で『日本国憲法』第9条を引き、「平和憲法」であることを、併せて第21条で「思想信条の自由」を確認させて、新聞記事を紹介、読み合わせながら考えさせた。授業の最後に20分

弱の時間を取り、「5. さて、世界で2番目かつ最後の原爆被災地・長崎を訪れた君達は、これらの状況をどのように考えるか？」と問い掛けて、感想を書かせた。

----- 【生徒の感想から】 -----

北朝鮮が核実験するのは、やっぱり何らかの目的があるからだと思います。今、またどこかに落としたり、戦争になってしまうと思う。もし日本に落とされるのだったら、日本は何もできないし、他の国やアメリカに助けを求めしかできない。唯一日本ができることと言ったら、それはやはり核を作らせないとか、反対をすることしかないと思う。それに国民なんてものは本当に小さな事しかできないと思う。核反対とか言っても何も変わらないし、やめさせることだってできない。だから今、私たちにできる本当のことは、核を作らせないとかというよりも、落とされないと（安閑と）思っているのではなく、過去の経験を生かして、もし落とされたら…のことを考えることだと思う。〔男子〕

北朝鮮が核開発を行っていることは前々からニュースでも新聞でも取り扱われていたので知っていて、中学の時に広島、そして高校で長崎に行って、核の脅威を学んだ僕は、核開発はすべきではないと思う。今の政治家達は「日本も核武装をすべきだ！」とか言っているけれど、そんなことをしたら何十年も日本が時間を掛けて培ってきた平和というものが無にかえり、平和を願う人々の思いが届かなくなってしまうと思う。だから日本は日本なりに平和にやっていくべきだと思う。その中で金融制裁を強めたり、できることをやればいいのかと思う。〔男子〕

資料の中に、核を日本も保有すべきか議論するべきだとあった。僕はそんなもの議論などせず、永久に保有しないことを望んでいる。なぜ人間は戦争を続けなければならないのか。感想文の中にあつた「そこまでして得たかったものは人の命より大切なものなのか」という文に、僕は全くその通りだと思った。たとえこの先、核保有について議論がなされたとしても、決して保有することにならないよう、僕は願っている。そのために僕のわずかな力で何かできることがあるなら、僕は何でもしたいと思う。

日本は唯一の被爆国だ。だからこそ僕らにしかわからないこともあると思う。そんな僕らが核など保有してはいけない。ずっと永遠に平和を願う僕は、永遠の平和主義者でいたい。〔男子〕

日本の核保有と自分達が未来のためにしていけることについて考えてみる。

まず日本は核を保有すべきか否かという問題について。正直なところ、自分は迷っている。なぜなら、核は外交上の究極の切り札となりうる反面、非核三原則というルールを自ら破ることにより、日本の主張の重みや説得力がなくなってしまうと考えるからだ。

次に、未来のためにできることは何か？ということについて。第一に核の悲惨さや恐怖を知ることから始まり、そして次の世代に語り継いでいくことだと思う。

今、世界が北朝鮮やパキスタンなどの核保有を問題にしているが、一人一人が核に対する正しい知識や常識を身につけることが大事だと実感した。〔男子〕

世界各国から幾度となく警告があつたにも関わらず、北朝鮮は核実験を実施し、成功したと報告した。何故だというより他がない。この報道を耳にした時、やはり全世界の平和は永遠に実現不可能なのかと胸を痛くした。核を持つ必要は、核実験を行う必要はあるのか。いや絶対にない。あるわけがないと感じる。北朝鮮はこのことは戦争を起こさないためなどと、平和のために行ったようなことを述べている。しかし矛盾だと思う。非常にくだらしない。そして許せない。他にも核保有国は幾つかあるが、全て放棄すべきだというのは当然の意見だ。そこからどう行動すべきかで平和への道が繋がっていく方向が決まると思う。〔男子〕

修学旅行記の中に、外国の方はどんな気持ちで来ているのかと思ったことや、そこまでして得たかったものは人の命よりも大切なものかと思った、ということが書いてありました。自分は原爆資料館を見て、戦争の恐ろしさや悲惨さを学ぶことができましたが、正直言ってここまで深く考えていませんでした。同じモノを見てそう思った人がこのクラスにいることに感動しました。そしてもっと深く学ばなければいけないな、と思いました。〔女子〕

まず、北朝鮮の核実験については、なかなか賛成できるものではない。なぜなら核により周辺各国の人が危険にさらされる可能性があるからだ。しかし、北朝鮮に核をなくすように求めているアメリカやロシア、中国などの国も核を持っているという現状がまずおかしいと思う。これでは、本当の平和はどんなにかかっても訪れるものではないと思う。

次に、国内の核問題として日本は核を持つべきかどうかだが、自分は核は保有すべきではないと思う。日本は唯一の被爆国であり、法律も非核三原則という素晴らしい原則があるのだから、日本としては世界各国にこの原則を伝えていくべきだと思う。

最後に、長崎で行われた国際平和シンポジウムについて、被爆地から原爆の恐ろしさを世界各国に伝えていき、世界各国が原爆の恐ろしさを知ることが大切なのだと感じた。〔男子〕

長崎の夜に一千万ドルの夜景が見える稲佐山へ行った時に「今見えている町全部が一度核の爆撃にあっている」と思ったらゾッとした。今見えている町全部を壊す威力を持っている核爆弾は絶対に使用するものではないと思った。

核をなくそうという運動が起きているのに、世界にはまだ保有していない国がバカらしくなるくらいの保有国と核がある。他国への威嚇のためなどと言っているうちは、世界平和なんて訪れないだろう。核をなくそうと言っている国が持っていたら意味がない。まずは「自分の国から」と、核を自分の国から捨てるような勇気のある国があってくれればと思った。〔男子〕

「戦争はよくないか？核兵器を保有してはいけないか？」と問われれば、大抵の人は「よくない。」と答えるだろうし、自分もその中の一人です。それは確かによくないことだと感じたりするのは当たり前だと思うし、そうでなくてはならないと思います。しかし、結局は表面上の言葉であって、だから核や戦争がなくなるか？といたら、そうではありません。

北朝鮮に限らず、アメリカやロシア、イギリスなどの国々も保有しているのでは何も変わりません。現状を目の当たりにして、自民党の中川さんのような意見を持つ人も出てきても仕方がないかもしれません。しかし、唯一の被爆国である日本が真剣に核のない世界にするために取り組んでいかなければならないと思います。

しかし、実際のところ、どう行動すればいいかわからず、こうやって言うだけしかできない自分にもどかしさを覚えます。〔男子〕

今日の授業は、修学旅行の続きだと思いました。修学旅行で見て、感じたものを今日の授業で明確にできました。世界的に見れば、日本なんて小さな国だけど、その小さな国に核爆弾が一つ落ちただけでも14万人もの人々が死んでしまったのだから、それを思えば、現在核を所有している国の気が知れないです。

国際平和を願う人々がいる一方で、いつまでもつまらない理由で核を所有し、その人々の願いを台無しにする人もいます。悲しい事実だと思います。なぜ世界中で核を一斉に放棄できないのか、核をなくすための努力をもっと考えていきたいです。〔女子〕

現在、いずれの学校—特に高校現場—でも、生徒達の活発な議論は起こりづらい。ディベート形式にするなどの仕掛けが必要になってくるが、今回の授業でそのような方式は採らなかった。単に私の

手抜きではあるが、生徒が書いた感想は、誤字・脱字の訂正を除いて「生の声」を全てワープロに打ち込み、プリントして後日SHRで読み合わせた。このようにして自分の考えと友人達の考えの違いや、新たな視点に目を向けることができれば十分だと考えている。

私は日頃からあまり「意見誘導をしないようにしよう」と考えている。しかし、国語の授業内では一定の方向性を見出させることを優先してしまうあまり、誘導尋問のような発問を行うことも少なくはない。(私の力不足のなせるところで常に反省しているが…) 今回の授業では、新聞報道された記事を並べ、そして生徒達が長崎の地で見聞きした実感を中心に置いて、率直な意見を書いて欲しいと願った。小論文指導では「問題・課題に対して自分なりの対策を立てよう」ということが常道であるが、限られた時間の中でそこまでは求めなかった。また、大きな問題であるので「一個人の力でできることの小ささ」に改めて気づくだけでも良いと考えた。ただ、その現実認識から何が自分達にできるかを考えられる生徒に成長して欲しいとも願っている。その点では抜粋した「感想」ばかりでなく、まだまだ稚拙ではあるが彼らなりに向き合えたのではないかと思っている。

平成18年10月の北朝鮮による核実験は、彼らに身近な恐怖・脅威を印象づけた。広島・長崎で61年前に起こったことも過去の出来事と片付けられない現実味があったのではないかと思う。一様に平和を願う論調となったが、北朝鮮との関係には複雑な思いを抱く者も少なくなかった。そこには生理的な嫌悪も見られたが、事実を積み重ねる中で私達が考え得る現実的な対応を模索していく土壌だけ形成できればよいと思う。恒久平和を希求する気持ちを持っている者が多く、ホッとしました。

4. 実践の感想と今後の課題

私は2年間に渡るNIE実践の中で、HRで諸問題を考えるきっかけとして新聞記事を有効に使おうと心掛けた。この活動の中で、ともすれば閉塞しがちな学校から「世間」を透かして見る糸口が、生徒の中に芽生えたならば幸いである。

今年度は未履修問題、いじめ問題、教育基本法改正と教育に関わる諸問題が新聞でも多く報じられた年であった。本校では未履修科目はなかったが、新聞記事を活用し考えることもした。また、いじめ問題では、「命の尊さ」を考えることも含めながら、朝日新聞で連載された「いじめている君へ・いじめられている君へ」という著名人によるメッセージを読み合わせ、HRで考える活動もした。現在は平穏な学校生活を送っている生徒達の中に、「いじめ・いじめられた経験」が小中学校で少なからずあった現実にも向き合った。また、2年生の終わりに進路を考える上で、ニート・フリーター問題を考える場面上で新聞記事を利用し、進路目標を明確にする大切さを説くこともした。

残念ながら、教室内に設置された新聞に目を向ける者の数が飛躍的に伸びることはなかった。また、家庭で新聞記事を話題にすることも、それほど多くはなかったようである。(生徒の家庭生活における家族との会話時間や内容から想像するに、仕方のない現実も一方ではあるが…)。ただし、インターネット等の普及による新聞購読者の減少の中、新聞に目を向けることの助けにはなったかもしれない。また、世の中は様々な意見を持つ者で構成されていることが、クラスという小社会の中でも「他者理解による自己理解」の力を養う材料にはなり得たと考える。

私個人では、実践校の担当者という立場で学校内に広める求心力になりえなかったことと、国語という教科活動の中で上手に新聞を扱えなかったことが残念である。一方で、教育課程の制約を受ける教育内容の中で、教科書を離れたものを教材化することの難しさも痛感する機会にもなった。新聞は即時性を売り物とする媒体であり、批評や批判を乗り越えたある意味「古典教材」を通常扱う私達にとって、教材として使うには新鮮ではあるが教師自身の力量も問われる難しさがあるように感じた。

来年度は3年生の選択授業で表現を中心とした「国語表現I」を担当することになったので、再び新聞記事と向き合いながら、教材として授業の俎上に上げたいと考えている。

この2年間のNIEへの取り組みは、教員生活の折り返しを迎えた私にとって、新たに学習をする場をいただいた思いで過ごした日々であり、多くの新聞社の方々のお力添えには深く感謝している。

パネリスト 冒頭発言

国際化と日本への影響をめぐっての議論

テロ脅威で問題複雑に



米国で有罪の判決で知られ、05年12月までホワイトハウスの副報道官を務めた(NBC)上級アジア部長を務めた。ジョージタウン大教授を務める。50歳。

マイケル・グリーンさん
国際化が進む中で、テロ脅威が問題複雑にしている。...

枠組みの信頼性担保を



09年外務省に入り、経済局長などを歴任。アジア大連合局長在任中の就任。日朝合意会談を支援に務めた。05年8月退官し、現在は東京大教授など。50歳。

田中均さん
非核三原則を堅持する。枠組みの信頼性担保を...

不拡散と核軍縮は両輪



長崎大医学部卒、助教授、医学部長を経て01年に同学長を務めた。日本物理学会理事なども歴任。「世界平和アミーゴ七人委員会」委員の一人。41歳。

土山 秀夫さん
非核三原則の堅持。不拡散と核軍縮は両輪...

信頼醸成 東アジアから



千葉大助教授などをを経て09年から退任。著書は「戦争を止める」「自衛隊のなかのアメリカ」など多数。師範に「平和のリアリズム」で石川忠雄氏。50歳。

藤原 煥一さん
非核三原則の堅持。信頼醸成を東アジアから...

国際化の進展に伴い、日本はますます国際社会に深く関与する必要がある。...

作家 高校生と語り合う

作家と高校生が語り合う。林京子さんの被爆体験。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。



林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

林京子さんの被爆体験

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

「動くものなくなっていく」

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。



滝巻礼子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。滝巻礼子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

田口京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。田口京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

「知りたい気持ち大切」

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

「消えない大地の記憶」

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

「地道に関心高めたい」

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。



加藤 千洋
NHK 朝日新聞
テレビ朝日系「週刊ステーション」コメンテーター

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。

林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。林京子さんは、被爆体験をした作家。その体験を、高校生と語り合う。